

74 ^{くろもとだに}黒本谷古墳

— 県内に2例しかない銅鏡を副葬する終末期古墳 —

所在地

八頭郡智頭町智頭字黒本谷

立地

牛臥山(614m)の南方裾部の緩傾斜面に立地する。

時期

古墳時代後期末

発見と調査

果樹園造成工事に伴って石室が破壊され、遺物が出土したことから、1980年(昭和55)に智頭町教育委員会が発掘調査を行なった(文献3)。

遺跡の種類

横穴式石室。墳丘は円墳と推定される。

遺構と遺物

遺物が出土する以前から、果樹園の開墾に伴って横穴式石室の構成石材が移動されており、発掘調査時点では、奥壁最下段と、奥側の左側壁最下段の2石しか残存しなかった(図1)。ただし、石材の抜き取り穴が観察でき、左片袖式で、玄室長2.4m、幅1.3m、南東側に開口する横穴式石室に復元できた。奥壁近くの右側壁沿いの床面上に平石があり、棺台と考えられる。

なお、墳丘に関する情報はほとんどないが、現地の状況から径10mほどの小規模な円墳と推定された。

出土遺物は、須恵器22点、鉄刀2本(うち1本は圭頭大刀)、轡^{くつわ}1点、耳環1点、銅鏡^{どうわん}1点、管玉1点である。このうち、須恵器6点、管玉1点以外は石室が破壊された際に出土したもので、石室内における出土位置は定かでない。

須恵器は、坏蓋13点、坏身5点、脚付碗1点、無蓋高坏1点、平瓶2点がある(図2)。これらは胎土によって大きく2群に分かれ、灰白色を呈して焼成が軟質なもの(図2-1~10・12・13・16・17・22)と、灰色を呈

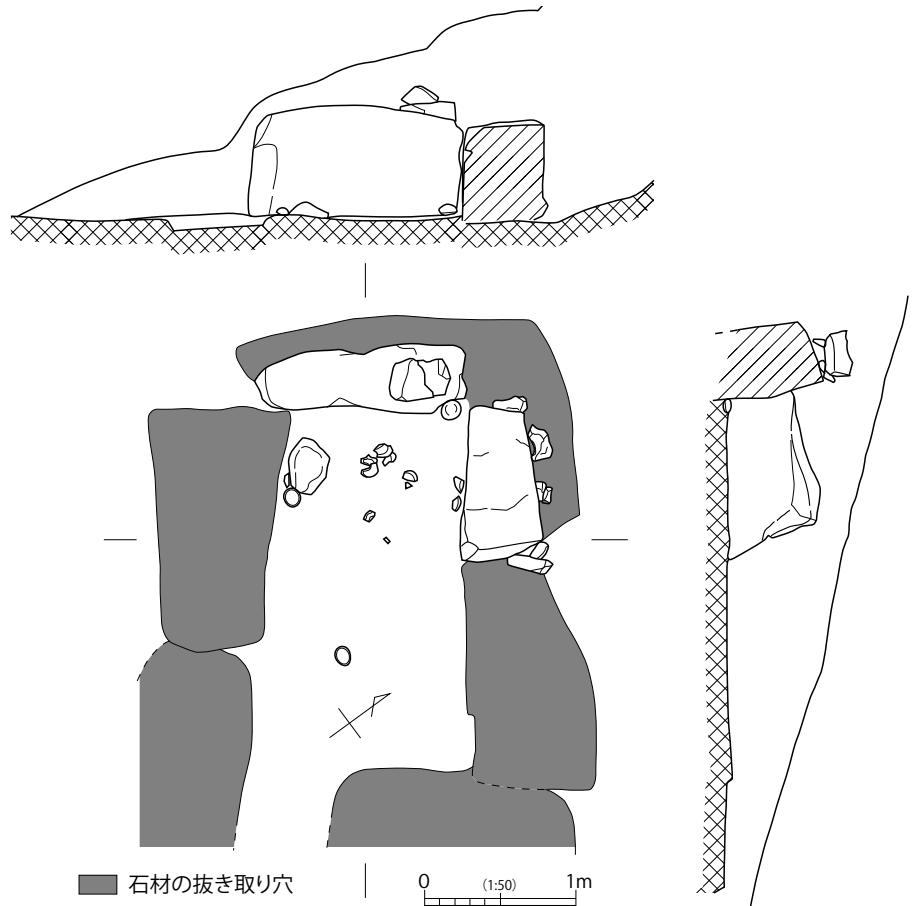


図1 黒本谷古墳横穴式石室実測図

して通有の堅緻な焼成のもの(図2-11・14・15・18~21)である。

坏のうち、前者の胎土のものは、ほとんどが坏蓋で、坏身は1点しかない。器壁が厚く、手にすると重量感があるが、それは成形後の外面調整をほとんど行なわないからである。天井部のヘラケズリはほとんどなく、粘土紐の巻上げ痕を丁寧に消さないものも見られる。土器の成形ののち、回転台からヘラ状工具で切り離し、乾燥工程に移ると見られるが、天井部には竹ひご状の細い繊維の圧痕が観察できるほか、乾燥時には土器表面が濡れて指紋が付きやすい状態だったことが窺える。

一方、後者の胎土のものはほとんどが坏身で、坏蓋は1点のみで、組み合わせがアンバランスである。やはり、ほとんど天井部や底部のヘラケズリはなく、回転台からヘラ切りした後にあまり手を加えていない。

胎土の違いで分けられる2者は、製作者の違いと考えうるが、時期差の指標とされる口縁端部の形態やケズリの範囲、口径などは顕著な差はないため、大きな時期差はないと考えられる。陶邑編年に照らすと、TK209型式段階と考えられる。

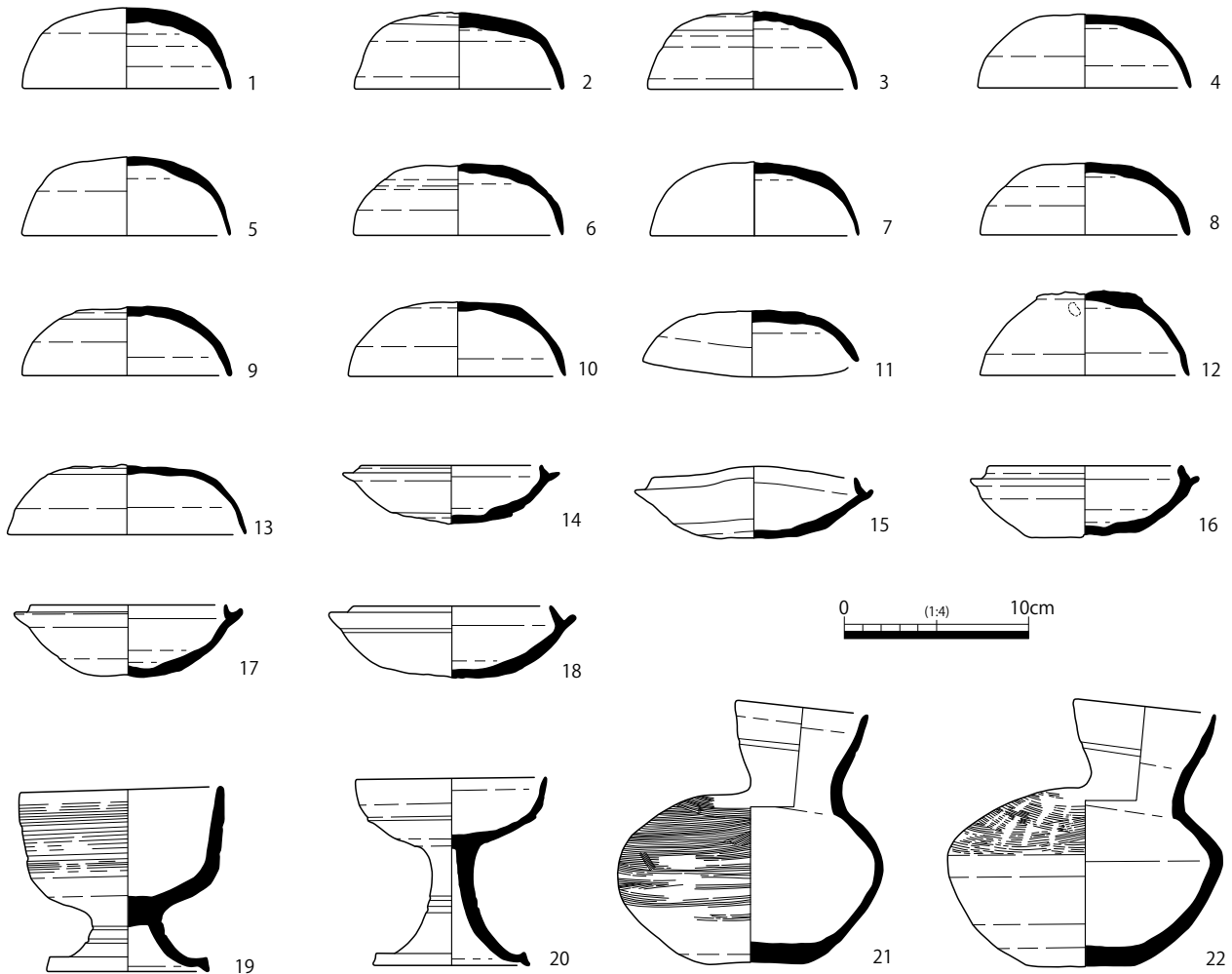


図2 黒本谷古墳出土須恵器実測図

脚付碗は、口径 10.7cm、高さ 10.0cm で、胴部にカキメを施す。無蓋高坏は口径 10.2cm、高さ 10.2cm である。脚部の中央に 2 条の凹線文があるがスカシはない。平瓶はやや小さいものと大きいものがあり、それぞれ口径 7.0cm、7.6cm、器高 14.3cm、15.5cm、胴部最大径 14.4cm、15.0cm を測る。いずれも、陶邑編年に照らすと、TK209 型式段階と考えられる。

発掘調査以前に出土していた遺物には鉄刀、馬具、銅鏡など、主に金属製品がある（図 3）。

鉄刀が 2 本あり、1 本は圭頭大刀で、柄頭、柄縁金具、鞘口金具、鞘尾金具が残る（図 3-23～31）。柄頭と鞘尾金具にはそれぞれ貴金具が付随し、内部の木材も遺存していた。

鉄刀の全長は 78.3cm、茎長 8.2cm、刃部幅 3.0cm を測る。刃部は厚さ 0.7cm あり、もう 1 本の鉄刀よりも厚い作りになっている。

幅 0.5cm の金銅製柄縁装具は鉄刀に銹着しているが、

その他の装具は刀本体とは別に保管されている。

柄頭は、菊地芳朗が C1 類と分類するもので、頂部の張り出しに腹（刃部）側と背側の高低差が大きいものである（文献 2）。ただし、腹側の内反する湾曲が弱くなった 2 式に属す。長さ 7.5cm、最大幅 5.5cm、最も厚い場所で 2.9cm を測る。外郭の斜面部には、5 箇所連続する凹面をつけて装飾的である。内郭には薄い金属板が貼り付けられ、部分的にしか残存しないが、表面に列点文が施されていることが観察できる。さらに、外郭の背側には、ポンチ状の工具による列点で 3 重同心円文が施されている。柄頭に接して幅 0.5cm で刻み目を施した貴金具が残存している。

柄縁に接して、刀身に鞘材が残存するが、その外面に金銅板が巻かれていた。現状では破片となって外れているが、本来は長さ 8.4cm あったようである。鉄刀の中央部には、やはり鞘材の残りが良い部分があるので、鞘間にも金銅製の装具があったものと考えられる。無文で

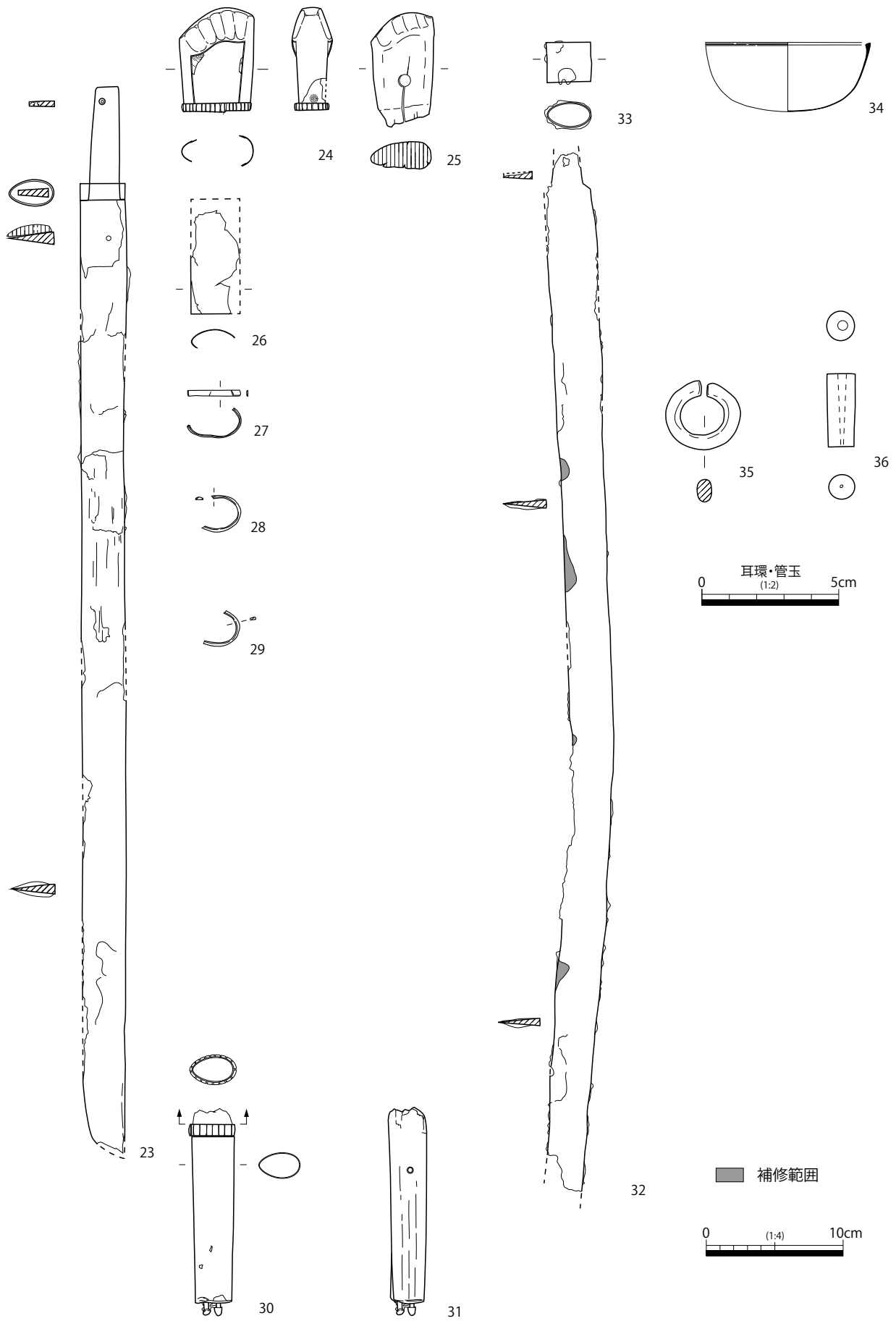


图3 黒本谷古墳出土遺物実測図

幅0.4cmの細い責金具が3点あり、鞆の金銅装部に伴ったと考えられる。

鞆尻金具も残存し、鉄製の蟹目釘が2本打たれている。鞆尻金具は長さ12.1cmで、表裏2枚の部材を接着して作っている。柄頭と同様の刻み目をもつ、幅0.8cmの責金具が伴う。金具内部に鞆材が残存しており、ヒノキ材を2枚合わせにして木製目釘でとめる。鞆尻金具の端部は何かにつけたように凹んで金銅板がめくれているが、新しい傷ではなく、使用時のものかもしれない。

もう1本の鉄刀は、遺存状態が悪く変形もあるが、直刀と考えられる。残存長74.8cmを測り、両関と考えられる。茎と切先を欠くが、圭頭大刀よりも大きい。鉄器表面の剥離が進んでいるためか木質は観察できないが、鉄製の柄縁金具があり、本来は鞆や柄などの装具が伴っていたであろう。厚さは0.6cmと大きさの割に薄く、そのために刀身が波打つように変形している。

銅鏡は、高台や脚が付かないタイプで丸底、腰が張る深い形態をなす(図3-34)。口縁部はやや直立気味で、端部が肥厚して面をなす。毛利光俊彦の分類で無台鏡のA I b類に相当する(文献4)。口径12.0cm、高さ6.0cm、器壁は、口縁端部で3.5mmを測るが、それ以下では0.5mmの薄さである。口縁部外面に2～3条の沈線が巡るが、ケガキ線状に細い部分もある。

耳環は、外径2.5cmで、銅芯金箔張りである。幅0.5cm、厚さは0.7cmである。

管玉は、長さ2.7cm、径0.9cmを測り、花仙山産と考えられる濃緑色の碧玉製で、片面穿孔である。

鉄製の環状鏡板付轡が存在するが、現在は出土時よりも遺存状態が悪く、新たに凶化できなかった。鏡板の形状は偏円形で、別造りの立間金具を介して小型の円環をつなぐ。引手は銜先環に鏡板とともに連結されており、引手の柄には捻りがある。これらの諸特徴から、6世紀

末～7世紀初頭に位置付けられよう(文献1)。

特徴と意義

石室の破壊に伴って出土したものが多く、本来の副葬位置やセット関係が不明な点があるものの、大きな時期差はなく、古墳時代後期末葉の遺物のセット関係を比較的よく示していると考えられる。

智頭町は山陰と山陽を結ぶ交通の要衝地であり、銅鏡や圭頭大刀の存在は、先進的な文物の受容に積極的な有力者の存在を裏付ける。一方、副葬須恵器はかなり在地色が強く、技術的にはやや稚拙な地方窯の存在も窺える。

現状と遺物

遺物は、智頭町埋蔵文化財センターで展示、保管されている。保存処理は行なわれているものの、出土時よりも破損が進んだものもある。

文献

- 岡安光彦 1984 「いわゆる『素環の轡』について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号 pp. 95-120
- 菊地芳朗 2010 『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会(第3章「装飾付大刀の系譜とその展開」 pp. 69-110)
- 中島博恭 1983 「黒本谷古墳発掘調査報告」『中河原古墳・黒本谷古墳発掘調査報告書』智頭町教育委員会 pp. 19-39
- 毛利光俊彦 1991 「青銅製容器・ガラス容器」『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ副葬品 雄山閣 pp. 189-205 (高田 健一)